
深夜、気だるい地下の禁煙席

桃山マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深夜、気だるい地下の禁煙席

【Nコード】

N4738P

【作者名】

桃山マサル

【あらすじ】

眠れない夜。地下のファミレスで暇を潰していると、不思議な女性が現れた。村上春樹風小説。

ダウンジャケットの温もりは炬燵の温もりに似ている気がする。たとえ、中に入っているのが本物の羽毛ではない安物だとしても、冬の寒風を跳ね返す厚ぼったい生地には、心強い安心感を覚えずにはいられない。守られている、という感じがする。

フード付きのもこもこした襟元に首をうずめて、私は夜の街を歩いていた。

どこかに行くわけでもない。私は単に歩いていた。

時計の針はすでに頂点を過ぎている。

何となく眠れなかった。将来が不安になったとか、気が高ぶっていたとか、そういった明確な理由があるわけではない。単に、眠れなかった。たまにこういうときがあるのだ。昼間はいつも通り適切かつ適切に仕事をこなし、家に帰ってからも特に変わったこともなく、軽くネットを徘徊してから夕食を軽くしたため、風呂に入り、ベッドの中に潜り込んだはいいが、何故か目が冴えて一向に眠りがやってこない。努力すればするほど眠りは遠ざかり、暗闇に目が慣れて天井の蛍光灯に反射するわずかな月明かりさえ眩しいと思うほどになって、私は身を起こした。寝巻きを脱ぎ、適当な服に着替え、愛用のダウンジャケットを羽織り、私は夜の街へと繰り出した。

あてもなく夜の街を彷徨うのが、割と好きだった。

徒然なるままになんとやら、という感覚は時代が移ろいでも変わることがないようだ。木造平屋が天突く摩天楼に建て替えられ、牛車が軽自動車に取って代わり、柔らかな月明かりがけばけばしいネオンに打ち消されても、人間の根っこの部分は変わっていないのだろう。キャバクラの客引きを適当にあしらいながら、私はてくてくと歩き続けた。

ほつと吐いた息が白かった。

ああ、冬なんだと、にべもない感想を抱いた。私がこの土地で生きている限り、繰り返される四つの季節。ちっぽけな人間なんぞに、大自然の摂理を覆すことはできないわけで、私が今どんなに春の温かい日差しを望もうと、冷たい風は容赦なく私の頬を打つ。服の隙間から入り込んだ冷気が首筋まで昇ってきて、私はぶるつと身を震わせた。

歩くのは好きだが、この寒さの中でいつまでも歩いていては風邪をひいてしまいそうだった。どこか温かい場所に避難しなくては。

結論から言えば、私は地下のファミレスに入った。そこに至るまでの私の逡巡や、何気ない荒涼感や、唐突に胸に押し寄せた寂しさなどは、正直に言えば一時の気の迷いとも言うべきもので、私は暖房の効いた店内に入った途端に、つい先ほどまで身体を支配していたセンチメンタルな感情を全て置き去りにしてしまった。人間は周囲の環境によって気持ちの持ちようも随分変わるものだと、私は言い訳がましいことを考えた。

店のドアを開け、レジの前で少し待っていると、桃色チエック模様の制服を着たウエイトレスが盆を片手にやって来た。

「お一人様ですか？」

「はい」

「喫煙席と禁煙席がありますが、どちらがよろしいでしょうか？」

「禁煙席で」

「かしこまりました。案内します」

連れて行かれたのは四人掛けのボックス席だった。ポケットに両手をつ込んだまま、私はテーブルと椅子の間に身を滑り込ませ、背もたれに体重をあずけた。ぼふっ、とジャケット内の空気が潰れる音がした。

「すぐに水とお絞りををお持ちします」と言っ、ウエイトレスは厨房へと戻って行った。

ラミネート加工されたメニュー冊子を手にとる。表紙には『期間限定メニュー！』の大きな文字が躍っていた。私は訳も無く、この

文字を製作した人のことを思った。この文字を装飾加工し、印刷にまで漕ぎつけた人の労力は如何なるものだったか。何度も上司に怒られて、何度も校正させられて、くたくたに疲れて家路を辿った日もあつたらうか。地下鉄に乗って、黒いガラスに映るうらぶれた自分の顔を見て、溜息を漏らしたりしただろうか。家族と一緒にファミレスに入って、メニュー冊子を手にとって——自分が作つた題字を見て、ほんの少しだけ、誇らしい気持ちになつたりするのだろうか。

それはとても素敵な巡り合わせだと思う。

「失礼します」

ウエイトレスが氷の入った水と、業務用のお絞りを運んできた。

私は広げていたメニュー冊子を一旦閉じた。

「ご注文がお決まりになりましたら、ボタンでお呼びください」

頭を下げたウエイトレスの細いうなじを見て、夏祭りを思い出した。

前を歩く着物姿の女性を眺めながら、夜店と提灯と黒山の隙間を縫うようにして歩いたあの日。私の隣には誰かいただろうか？ いたような気もする。一人だったような気もする。どちらでもたいした違いはないのだけれど。誰もが楽しそうにメインイベントの打ち上げ花火を待ち望み、高揚してヒリヒリした空気の中で、私は唐突な孤独感に苛まれた。誰かと一緒に、もしくは一人で、夜店の行列から抜け出して暗い路地裏に入って、自分たちの鼓動の音を確認めた。自分たちが有象無象の一部ではなく、一つの独立した意識なのだというアイデンティティを忘れたくなかった。

何て幼稚で青臭い考えだろうか。自分が“自分”であつたところで、一銭の価値にもならないと、まともな大人ならば誰でも知っている。いや、あの頃の私もそのことには気付いていたのだろう。気付きかけていたのだろう。けど、それを否定したくて、世の中の残酷さから目を逸らしたくて、必死に逃げ惑っていたのだ。

そうして追いつかれたのが、今の私だ。

禁煙席と喫煙席は曇りガラスの間仕切りによって分けられていた。私は生まれてからこの方、一度も煙草を吸ったことはない。吸いたいと思ったこともない。そもそも、子供の頃は煙草の存在すらまともに知らなかった。家族はおるか、親戚にすら煙草を吸う人がいなかったからだ。

今にして思えば奇妙な一族だ。理由は分らないが、私の属する家系は嗜好品を好まなかった。冠婚葬祭の時などは酒を飲んだりするが、それでも顔を真っ赤にして酔っ払うような大人は一人もいなかった。皆、ほどほどに飲み、ほどほどに騒いでいた。幼少の頃の自分はそれが当たり前だと思っていたので、自分が酒を飲める歳になってから、煙の充満した居酒屋で泥酔するサラリーマンを見て、軽いカルチャーショックを受けたものだ。

呼び出しボタンを押す。

ピンポンと、空港で使われていそうなチャイム音が響いた。

ややあってウエイトレスが電卓のような機械（ハンディタイミナルという名前らしい。後で友人に聞いて知った）を持ってやってきた。私はサラダとドリンクバーを注文した。『ドリンクバーを注文』という日本語は間違っている気がするが、一度でもドリンクバーを利用したことのある人間ならば意味は通じるだろう。

言葉なんて通じればいいのだ。美しい日本語なんて笑われるだけだ。今は。

座席から腰を上げ、私はドリンクバーへと向かった。ドリンクバーは丁度、禁煙席と喫煙席の中間にあった。コップに氷を入れ、アイスコーヒーを注ぎながら、私は喫煙席の方を見た。あちらの方が客が多かった。私のような一人客がボックス席を利用できるほど、ガラガラに空いている禁煙席と比べて、喫煙席はほぼ満席だった。全席禁煙の店も増えてきた昨今である。愛煙家にとっては腰を落ち着けて煙草を吸える空間は貴重なのだろう。深夜だというのにあの客の入りは異常とも思えた。間仕切りの向こう側だけ空気の色が違

って見えた。

アイスコーヒーにミルクとシロップを入れ、マドラーでぐるぐると掻き混ぜる。からからと氷の良い音がした。冬の最中にアイスコーヒーというのも季節外れだが、店内はダウンジャケットを着ていると汗ばむほどに暖房が効いていたので、むしろ冷たい飲み物が恋しくなるほどだった。席に戻り、コーヒーを口に含む。苦味と甘味が下町のもんじゃ焼きのように意地汚く混じりあって、舌の奥に広がった。

私は、はあと肩の力を抜いた。この安っぽい味が何とも言えない。一杯数千円のコーヒーがあつたとして、私がその一杯で数千円分の満足を得られるとは思えない。得るのは満足ではなく『数千円のコーヒーを飲んだ』という自負心だけだろう。どうせ味なんてろくに分かりやしないのだ。最高級品質なんて文句は、どこかの石油王にでも好きなだけ聞かせればいい。少なくとも私は、素人にも不味いと分かるチエーンファミレスのアイスコーヒーで、こんなにも満足できるのだから。

幸せの閾値は低ければ低いほど良いと、誰か偉い人が提唱してくれないだろうか。

人いきれの喫煙席と比べて、禁煙席は平和だった。

手前のボックス席では、帽子を目深にかぶったおじさんが、シートからずり落ちそうになりながら寝ていた。私の席からは、その帽子の先っちょだけが見える。斜向かいの二人席では、大学生らしき青年が頼杖を付いて微かな寝息を立てていた。テーブルの上には開かれたままのノート。おぼろげに握られたシャーペンが今にも手からこぼれ落ちそうで、けど落ちなくて、その危うさ加減が何とも面白くて、私はサラダを食べながら少し吹き出してしまった。

地下という密閉された空間で、設定温度を間違ったのではないか

と疑いたくなるくらいに効いている暖房の熱に包まれながら、柔らかな椅子にもたれかかって居眠りをするのは、はたから見ても気持ち良さそうだった。私はたいして眠くはなかったが、この場所でも熟睡できるのではないかとさえ思えた。

耳障りの良いジャズミュージックが程よい音量で店内に流れている。何度リピートされてもリピートに気付かないほどの、脳にすうと染みるBGMだった。私は音痴だし音楽に関しては不作法なほど何も知らないが、それでもこの曲を作ったミュージシャンは偉大だと思った。

食べ終わったサラダの皿の底に溜まった和風ドレッシングの残りを、元来食意地の張っている私は、勿体無いと思う。みじん切りにされた玉葱の一つを箸でつまみ上げ、口の中に放り込んで、これ以上はさすがにみつともないと自重し、サラダの皿をウエイトレスが持っていきやすいように通路側に寄せた。人差し指ほど残っていたアイスコーヒーを飲み干し、私は再びドリンクバーへと向かった。

期間限定のグレープフルーツジュースが注がれたコップを片手にボックス席に戻ると、そこには見たこともない女性が座っていた。濃い目のブラウンに染めたショートボブの髪。店内の蛍光灯に照らされて、天使の輪が輝いている。よく手入れされているようだ。シヤンプーは何を使っているのだろう——と、私は現実逃避するように、どうでもいいことを考えた。

「どうも」

女性は首だけで振り向いた。ボックス席の前で呆然と立ち尽くしていた私は、思わずコップを落としそうになった。可能な限り平静を装い「やあ」と返した。裏返っていたかもしれない。私は女性の対面へと座った。夕陽が滲む荒野のような色をしたグレープフルーツジュースの入ったコップを、静かにテーブルの上に置いた。

「誰？」

真っ先に出た言葉は至極実直な疑問だった。むしろ、それ以外に

何を言えればいいのか？

「誰だと思う？」

薄い唇が柔らかく弧を描いた。口紅の自然な照りが私の心を打った。

歳は二十代半ばといったところだろうか。正確には分からないし、面と向かって聞く勇氣もない。黒目と白目が異常なほどくつきりと分かれていて、そのコントラストの強い瞳に見据えられると、妙な気持ちになった。例えて言うならば、近所の森の中に、丸一日かけて秘密基地を作ったのはいいが、雨避けに張った黒いビニール袋の上をゆらゆらと揺れる木漏れ日を眺めているうちに、何もかもが馬鹿らしくなって、母親が台所で夕飯の味噌汁の具を切り刻んでいる僅かな間に、その秘密基地をバラバラに破壊してしまったときの、切なくて悲しいのに、どこか清々しいような不安定な気持ちだった。「皆目、見当が付かない」

「でしょうね。あなたには無理だと思ったわ。馬鹿ですもの」

罵倒されたことに数秒間気付かなかった。初対面の人間にそんな事を言われるなんて思ってもいなかったからだ。

「名前だけ教えてあげる。ロンドン。聞いたことはない？」

「ロンドン？　それが名前なのかい？」

「そうよ」

「こう言っでは失礼かもしれないけど……妙な名前だね。ロンドンって、イギリスのロンドンのことかな？」

「何て貧相なの、あなたの頭の中にある地図は！　『ロンドンって、イギリスのロンドンのことかな？』ですって。ああ、陳腐すぎて嘲笑すらできない。そんなの生後一年半の赤子だって思いつくわ。二十年以上生きてきて、あなたはその程度の発想しかできないの？」

他人とは、合わせ鏡に映ったn番目の自分に他ならないという事

実に気付いたのは、さて、いつ頃のことだったか。中学ではあるまい。高校？ いや、まだ先だ。

華々しく大学デビューを果たした同郷の友人を見たときだろうか。未成年なのにビールを浴びるほど飲んで、朝焼けのガードレールから揚げの残骸をぶちまけたサークルの後輩を見たときだろうか。研究室配属の直前に大学を休学し、ユーラシア大陸横断を成し遂げた同期生の話を又聞きしたときだろうか。卒論のために実験室に寝泊りしていたら、寝ぼけてX線照射機から放射能を漏れさせてしまった先輩の武勇伝を聞かされたときだろうか。

社会人になったときにはすでに理解していたと思うから、大学生活中に気付いたことは確かだと思う。

重要な事実ではないのだ。研究室のインド人から「彼はジーニアスだね」と称された先輩が発見したコンクリートの亀裂に関する革命的発見に比べれば、私が気付いた事実なんてアリジゴクの小便よりも拙い。

それでも、私にとってその事実が一つの教訓になっていることは確かである。

合わせ鏡とは言ってもなく無限の象徴である。そこに神秘性を見出すか、悪魔性を見出すかは個人の資質によって異なるだろう。昔、私が合わせ鏡の存在を知ったときに、試しに実家の洗面台の鏡と手鏡を使ってやってみたのだが、ひどくがっかりしたことを覚えている。だって、私の像は確かに“たくさん”映ったが、奥に行くにつれて像は小さくなって、結局は見えなくなってしまったからだ。「何だ、無限じゃないじゃん」

高校で有限と無限について習ったとき、思いのほかすんなり理解できたのは、このときの経験があったからかもしれない。数式の向こう側に果てしない荒野は広がっていても、見開きのノートに書けるテキストには限界があるのだと——つまりはそういうことだと、高校生の私は理解した。

「何を考えてるの？」

鎌首をもたげるように、女性が私の顔を覗き込んできた。

「ちよつと昔のこと」

「ああ、そういえばあなたにも昔があつたのね。どれだけ悲惨で惨めな過去だったか、わざわざ説明してくれなくてもいいわよ？ 簡単に想像がつくから」

私は小さく笑った。負け惜しみではなく、本心からの笑いだった。ロンドンと名乗った女性はムツと口を曲げた。

「何で笑つたの？」

「ごめん。つい」

「つい、であなたは人を笑うのね。笑われた人の心にどれだけの傷を負わせたかも知らずに。つい、であなたは人を自殺に追いやるのね。今まで、つい、でどれだけの人を殺してきたの？ 参考までに教えてくれる？」

話が飛躍し過ぎている気がするが、あながち間違いとも言い切れないのが怖い。私はこれまで、つい、でどれだけの人を殺してきたのだろう。少し考えてみる。

「……五人よりは多い……かもしれない」

「最低。あなたどうして生きてるの？ 今、この場で呼吸をしているの？ 呑気にグレイプフルーツジュースなんて飲んでるの？ 五人も殺しておいて、毎日をだらだらと無意味に生きて、死んだ人間に申し訳ないと思わないの？」

「でも、そういう君だって、つい、で人を傷つけたことくらいあるんじゃないのか？」

「今はあなたの話をしているの。私のことなんてどうでもいい」

バンツ、と女性はテーブルを叩いた。寝ていたおじさんが不機嫌そうに舌打ちして、寝返りを打った。シャープンを持っていた青年がビクッと身体を揺らして、何度か目をこすり瞬きをした後、すぐに同じ姿勢に戻った。

「私のことなんてどうでもいいの」

ロンドンと同じ言葉を繰り返した。先ほどよりも幾分か弱々しい口調だった。

「君は」私は慎重に言葉を選んだ。「少し寂しいみたいだ」

「ええ」

彼女は泣きそうな顔で頷いた。

「だから何？」

「何でも。……グレープフルーツジュース飲むかい？」

「いただくわ」

コップに残った夕陽色の液体を、彼女は一気に飲み下した。

寂しいという感情を覚える時期と、にきびが出来るようになる時期は、ほぼ同じだと思う。もっと言えば、自慰行為が生活基盤の中にしっかりと根付くようになる時期と同じである。寂しくて恋しくて、胸を掻き毟るほどに誰かを焦がれ、そうやって青春は色を付けていくのだと――街路樹の黄色いイチョウを見上げなら不意に思ったのは、私が初めて異性の非情さを知った日暮れのことだった。

こまっしゃくれた子供だったと思う。何も知らないくせに、何でも知っているような素振りをしていた。何一つとして理解してないのに、全てを理解しているような氣でいた。周りの大人からすれば、さぞかし生意気で小賢しい子供だったろうと思う。私が大人だったら顔を殴り飛ばしたくなるような子供だった。実際、私は何度か殴られた。頭を殴られ、脛を蹴られ、先生の話の途中で居眠りをして、一人だけ校庭を走らされたこともあった。数学の授業中にだ。校庭でソフトボールをしていた下級生たちの視線が痛かったのを、克明に覚えている。

「やっぱり惨めだったのね」

そんな話をロンドンにすると、彼女は小馬鹿にしたような笑みを

浮かべた。彼女の手元にはアイステイーのコップが置かれている。ドリンクバーは人数分頼む必要があったので、彼女が私のグレープフルーツジュースを飲んだ後に、申し訳なさそうなふりをしてウエイトレスを呼び、彼女の分のドリンクバーを注文した。もちろん私の金で。

「そりゃあ、たいした色恋沙汰もなかったし、青春ドラマみたいな出来事は起こらなかったけど、惨めというほどでもなかったよ。楽しかったしね」

「でも、後悔してるでしょ？」

「後悔しない青春なんてあるのかい？」

「なくもない」

便利な言葉だ。なくもない。十分の一だって、一億分の一だって、なくもない、なのだ。二重否定は人類が生み出した最強の文法だと思う。

「ところで、君の青春はどんなものだったんだい？」

「私の？」

ロンドンには意外そうに眉を跳ね上げた。

「そう、君の」

「それを、私に、聞くの？」

声から句読点が見えるような、わざとらしく不自然に区切った言葉だった。

「聞いちゃ駄目なのかい？」

「合衆国大統領に、核爆弾のスイッチはどこですか？ と聞くようなものよ」

「英雄じゃないか」

私が大袈裟に手を広げて見せると、ロンドンは呆れたように肩を落とした。

「そんなんだから、まともな恋の一つも出来ないのよ」

三人姉妹の二番目なの、と彼女は言った。

「私には姉も妹もいる。それってとても貴重なことだと思わない？
姉に嫉妬される理不尽さも、妹に昼寝を妨害される煩わしさも、
どちらも知ってるの。単純計算で、他の姉妹よりも二倍の人生経験
よ。それだけで私が優遇されていると分かるでしょう？」

「どうだかね、と私は返した。」

「幸運なことに、私たち姉妹は三つずつ歳が離れていたの。これが
どういうことか分かる？」

「学校で目を合わせなくて済む」

その通り、とロンドン是指を立てた。

「中学高校とも、私たちは同じ学校に進学したけれども、一度たり
とも先輩後輩の関係になったことはなかった。一人が卒業すれば一
人が入学する。ところでんみたい、押し出し押し出される関係ね。
私たち姉妹は背格好が似ていたから、年嵩の教師の中には『お前卒
業したはずなのに、何でまだここにいるんだ？』なんて冗談も言っ
てくる人もいたわ。もしかすると、冗談じゃなかったのかもしれない
けど」

くすくすと彼女は楽しそうに笑った。

「そんなに似ていたのかい？」

比重の異なる液体が混ざり合う際に見せる、奇跡のような流体の
煌めきを、彼女のアイスティのコップの中に見た。宇宙創造のヒ
ントはこんなにも身近にあるのに、どうして世の中の科学者たちは
気付かないのだろう。無秩序に見えて実際には寸分無く計算させら
れたシロップの動きには、詭弁ばかりの量子力学なんかよりもよ
ほど素直な定理が秘められている。

そういうことに、シンクタンクの堅物たちは一刻も早く気付いた
方がいい。オーダーメイドのスーツばかり着ているから、安物のセ
ーターのほころびが語るクオーークの暗号を見落とすのだ。

「似てるわね。初めて会った大人には、必ずと言っていいほど『三
つ子かな？』って聞かれたわ」

「見てみたいな」

「今はそんなに似てないわよ。化粧してるから」

「そうか。残念」

彼女の隣に彼女と同じ姿をした女性が二人並んでいるところを想像してみた。ピントのぼやけた曖昧な像が両側に浮かんでくる。姉の方は穏やかに微笑んでいる。妹の方は歯茎を見せて勝気に笑っている。その中間にいる彼女は――皮肉っぽい顔をして、私を見下している。私の勝手な想像に過ぎないが、結構当てはまっているのではないかと思えた。

「それで、肝心の君の青春は、どんなものだったんだい？」

「素晴らしいものだったわ。アメリカ文学に出てくるような、毎日がスウィーティだけれど、ちゃんとビター成分も含んでいる、口当たりの良い青春だった。高校のとき、駅を挟んだところにある男子校の人と恋をしたことがあったの。私たちは二人とも電車通学だったから、彼の部活が終わるのを、駅前のファーストフード店で待っていたこともあったわ。当時流行っていた恋愛漫画を片手に、フライドポテトをつまんで――ポテトの油で漫画が汚れないように注意して――二階の窓際の席から、下校する同じ学校の生徒たちや鼠色のスーツを着たサラリーマンなんかを、ほのかな優越感を持って見下ろしていた。ガラスの向こうには夏の気配が色濃く漂う七月の風が吹いていて、その風すらも、私たちと、私たちの恋を祝福しているような気がしていたわ。識者たちがあまねく語るように、恋と青春が混ざり合ったとき、それが人生において最も輝く瞬間となるのよ。まあ、あなたには分かりっこないでしょうけど。ダイヤモンドの輝きもいずれは朽ち果て失せるように、苦い恋の終わりも当然のように訪れたわ。さりげなくて呆気ない、文学部の学生が片手間に書いた下手糞な小説みたいな終わり方だった。付き合い始めてから半年くらい経って、突然彼の方から切り出してきたの。『別れよう』って。そのときの私の動揺っぷりをあなたに説明しても、きっと半分も理解してもらえないでしょうね。太陽が爆発してあと数年のうちに地球が滅ぶと言われた方が、いくらかマシと思えるほどの衝撃

だったわ。悲しかったし怖かったし、何より理由が分からなかった。私たちはつい昨日まで普通の恋人同士だったのよ？ 学校の休み時間にメールをして、帰りの待ち合わせをして、降りた駅で外灯の明かりから逃げるようにキスをした。そんな二人だったのに、どうして別れる必要があるの……って、同じことを彼に言っただわ。彼は、とても困ったような顔をしていた。そして理由が分からないまま、私の恋は終わりを告げた。ご都合主義のストーリーのように、後になって納得のいく理由が明かされる、なんてこともなかった。私は彼に対して恨みを持ったまま、高校を卒業して、そのまま二度と会うことはなかった——」

ロンドンはいすティーで喉を潤し「どう？」と得意気に私の顔を見た。

「素敵でしょう？」

「うん。とても素敵だ。ありきたりで月並みで、三十人分の青春を瓶に詰めて平均化したようなストーリーだけど、それでも素晴らしいことには変わらない」

「……………」

何かしらの激昂が飛んでくるかと思ったが、予想外にロンドンは黙り込んでしまった。地下の店内に漂うおごそかな雰囲気味わうように眺め、やがて開き直った表情をしてぐっと背筋を反らした。彼女の後頭部が後ろのおじさんの帽子に当たりそうになって、私はひやっとした。

「月並み……ね。さもありなん、よ。だって嘘だもの」

「作り話だったのかい？」

「ええ」

「どこから？」

「全部、初めから。私がこの場所にいることすら、全部嘘」

ドミノ倒しを盲目的に愛していた時期がある。

とにかく所構わず道具を選ばずドミノ倒しをした。『ドミノ倒しをした』という文脈には、いくらかの御幣が含まれているような気がするので、念のため注釈しておく。私と同じドミノ倒しフリークスにはわざわざ説明するまでもないことだが、ドミノ倒しの本質は、牌（もしくはそれに代わるもの。たとえば将棋駒やジェンガの棒）を並べる過程にある。整然と並べられたドミノが数秒の内に横たわる光景はもちろん壮観で快感だが、そんなものはおまけ付きのチョコレート菓子のチョコレートほどの価値しかない。要するに“倒す”ことよりも“並べる”ことの方が重要で面白いのだ。なので『ドミノ倒しをした』よりも『ドミノ並べをした』と表現した方が、私の言わんとしていることを正確に伝えることができる。しかし世間一般的には『ドミノ倒しをした』と言う方が通りが良いので、仕方なく『ドミノ倒しをした』と表現することにする。まことに遺憾である。

ドミノ倒しの何がそんなに魅力的だったのだろうか。

いや、今でもドミノ倒しは素晴らしい遊戯だという気持ちは変わらないのだが、今の私は当時ほどドミノ倒しに夢中になることはできない。多分、数メートルも並べた所で飽きるか挫けるかしてしまふと思う。本を積み重ねたり、ダンボールを組み合わせたたりして些細な仕掛けを作り、親や兄弟に迷惑そうな顔をされながら、台所や廊下に這いつくばって延々と牌を並べるような真似は、もうできない。

歳を取った、と言えばそれまでである。身体に積み重なった年月は、無邪気さと創造力を確実に削り取っていった。雪が大地を覆い、全てを凍りつかせるように、しんと降り降る歳月は、抗うことも出来ない私の心から快活さを奪い取っていった。

「つまり、君は最初のひと牌を押したわけだ」
「は？」

「誰かを理解するってことは、ドミノを並べるようなものなんだよ。君の顔、君の声、君の家族、君の歴史……そういったものを見たり聞いたりするたびに、私はドミノの牌を一つずつ並べていったんだ」

私はテーブルの上に牌を並べるジェスチャーをした。人差し指と親指で牌をつかみ、位置をずらしながら慎重に置いていく。牌の角度を微調整するところまでしっかりと再現したのだが、そんな細かい動作に反応するほど彼女はドミノ倒しについて造詣が深いわけでもなかった。

「でも、君はそれらの全てが嘘だと言った。私が必死に牌を並べているところに、君がひょいっと、どこからともなくやって来て、最初のひと牌を人差し指でちょこんと押した。綺麗に並んだ牌はパララッ……って固い本をめくるような音を立てて倒れていく。安全装置の“衝立”を置いておくべきだった、なんて私が涙目で後悔しているのを、君が悠々と見下ろしている。つまり、そういうことだろう？」

ロンドン は私の辞書では形容できない顔をした。

「あなたの独創的な比喻に対して感想を言う前に、一つ聞いておきたいんだけど、そのドミノにはゴールがあるのかしら？」

「ゴール？」

「どこまで並べれば終わりなのか、っていうこと」

「ドミノに終着点なんてあるわけじゃないか。そりゃあ現実的には牌の個数や部屋の大きさっていう限界があるけど、理論上のドミノには際限なんてない。いつまでも、いつまでも、並べ続ける。人間が他の人間のことを理解したと思っても、それが氷山の一角なんてのはよくある話で、どんなに愛し合ってる恋人同士でも、お互いのことを完璧に理解しているなんてことは有り得ない。そうだろう？ 人間一人を知るためには無限個の牌が必要なんだ。……ただし、終わりはないけど、終わらせることはできる」

躊躇いが自分の声に滲むのを、自分でも偽善的だと思った。

「もしも、君が言う“ゴール”があるとしたら、それはその人に対

する興味がなくなつたときだ。マザー・テレサが嘆き悲しむ結末だけだ」

愛の反対語を定義した彼女の素晴らしさは、ノーベル平和賞なんかでは到底評価し切れない。数億光年の果てに住むエイリアンだって、彼女の話聞けば涙を零すに違いない。

「要するに、あなたの中に蓄積された“私の情報”が全てご破算になつてしまった、って言いたいよね？」

「その通り」

「回りくどすぎるわ」

「そうかな？」

「そうよ。……で、どうするの？」

ロンドンは踏ん返り返つて腕を組んだ。挑戦的な視線を私に突き刺す。

「全部が白紙に戻つて、あなたは どうするつもり？ 私を責める？ 批難する？ それとも何もかもなかったことにして、地上に戻る？」

地上に戻るといふ言葉を聞いて、何て適材適所な表現なのだろうかと感心した。確かに、彼女の存在も、今までの話も、この場所が地下のファミレスだからこそ有り得たことのように思える。フォーマルスーツに身を包んだ富裕層がワインを片手に夜景を眺めるような高層ビルのレストランでは、決して起こらないような出来事だ。不味いコーヒーと不味い紅茶のコップを突き合わせながらでないと、こんな馬鹿げた話はできない。

「まさか」

と、私は手の平を上にした。

「全ての牌が倒れてしまうなんて、ドミノ倒しにはよくあることだ。慣れたドミノフリークスなら、表面上は落ち込んでいるように見せても、内心では狂喜乱舞しているだろうさ。『また最初から並び直せる！』ってね」

もはや年齢オーバーだが、もしも賽の河原に行き着いたとして、

石の塔を造れと鬼に脅迫されても、私は割と楽しんで石を積み上げられる自信がある。少なくとも最初の一年間くらいは、積んでは崩される無益な作業に、何かしらのゲーム性を見出すことができると思う。どれだけ綺麗に積めるかとか、逆にどれだけアンバランスな積み方ができるか、など。塔を崩しに来た鬼に毎回それを品評してもらうのも面白い趣向かもしれない。

『今回のほうだろうか？ サグラダ・ファミリアを模してみたんだけど』

『0点』

ガシヤリ。

『ガウディも舌を巻く辛口採点だね』

『真面目にやれよ』

『やってるよ。むしろ他の人たちよりも真剣じゃないか』

『だから駄目なんだよ』

なんて問答が繰り返されたら、それはそれは楽しい三途のバカンスになるだろう。

「嘘よ」

ロンドンの目尻からほろほろと水の滴がこぼれた。先ほどの強気な顔はあっけなく崩れ、迷子になった幼子のような顔がその下から現れた。

「そんなの嘘。何もかも嘘。あなたは私に幻滅している。嘘と本当の狭間でしか生きられない私を、あざ笑っている」

「そんな、何を根拠に——」

「分かるわよ。私は $n+1$ 番目のあなただもの」

子供の頃の記憶。

合わせ鏡の中に、たくさんの私が映っている。一番目の私、二番目の私、三番目の私……無限に続くと思われる像も、実際には限界

がある。

いや、違う。

本当は限界なんてない。

理論的にも現実的にも、像は無限にある。あるはずなのだ。

勝手に限界を作ったのは、私だ。

n番目までしか見えなかったのは——見ようとしなかったのは、私のせいだ。

「そうか」

腑に落ちるといふのは、まさにこういう感覚なのだろう。すとんと私の身体を中心に透明な何かが着地した。

「君は、ずっとあの鏡の中にいたのか」

子供の頃の私が見ることができたのはn番目まで。それ以降の像は見ることはできなかった。無限を信じないで、自分の限界を決め付けて“n+1番目”の像を見ようとしなかった。

「寂しかったわ。とても。“自分”に見つけられない孤独と恐怖がどれほどのものか、あなたに分かるかしら？ 現実で何気なく生きているあなたには分からないでしょうね。死ぬことも、生きること、自分で選択できるあなたには分かりっこないでしょうね。何も出来ず、何も選択できず、いつ終わるとも分からない孤独を背負うことが、どれだけ怖いのか、あなたには分かるわけがないわよね！」

声が地下の店内に反響した。

時間が止まった。店員も客も、誰もがこちらを見て固まった。

「分からないよ。分かるわけないじゃないか」

「そうでしょうとも！ あなたがそんなだから——そんな甲斐性なしだから、私がこうやって現実にやって来たのよ！」

やってきた方法は聞くまい。奇跡なんてしょっちゅう起こる。宇宙が発生してから経過した時間を考えれば、こんなことだって起こりえるだろう。

「寂しかった、本当に寂しかった。辛かった。もう、あの世界には戻りたくない。でも、この世界に来ても何をすればいいのか分から

ないの。あなたに文句を言う以外に、私がしたいことなんてないもの。私の存在意義なんてないもの。そのためだけに、この世界に生を受けたんだもの」

目尻から顎にかけて涙の筋がいくつも走った。

「ねえ、私は……どうすればいいの？」

後悔しない青春なんてない。その考えは今でも変わらない。しかし、今後はそれにもう一文付け加える必要があるようだ。

後悔しない人生なんてない。

私はいつだって後悔している。一秒前の自分に後悔している。

何を、言えばよかったのか。

何を言えば、彼女を救えたのか。

こんな私には分かりっこない。

夢から醒めるように、ロンドンとは地下の気だるい空気の中に消えていった。

朝になる前にファミレスを出た。

外の空気は相変わらず突き刺すように冷たくて、暖房で温められた体が急速に冷やされていく。ポケットに手を入れて、私は家の方へへと歩き出した。

何もかもが夢だったようで、しかし現実の出来事だった。店内にいた他の人間の反応を見れば分かる。あれは私一人が見た幻覚ではなかった。確かにロンドンという女性は存在し、私と話をしていた。テーブルの上に残されていたアイスティーのコップは、確かに彼女が飲んだものだった。

ほっ、と息を吐いた。変わらない白さが夜の闇に滲む。

気付けば何かを悔やんでいて、過去を変えたいと望んで、前向き

になることもできずに、ぐじぐじと悩んでばかりいる。そんな自分を叱るために現れた彼女もやはり、孤独感を胸に抱いたまま、何も出来ずに消えていった。

「……はあ」

ため息に万感の想いを込めたところで、誰が知ろう。

街灯の明かりが眩しすぎて、来るときよりはだいぶ重たくなった瞼をこすりながら、私は今日の仕事のために少しでも睡眠を取っておこうと、家路を急いだ。

* おわり *

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4738p/>

深夜、気だるい地下の禁煙席

2010年12月13日15時58分発行